

埼玉県内の天然氷作り（秩父を除く）

大久根 茂

はじめに

令和3年4月29日から6月20日まで、当館ではテーマ展「天然氷」を開催した。『紀要』の前号では、「秩父の天然氷作り」として秩父地方で過去に製氷が行われた場所とその状況についてまとめた。今回は、秩父を除く県内全域での状況について報告するものである。文書資料や聞き取りなどから計16か所の製氷地を確認できたが、経験者の大半が鬼籍に入っているため詳細不明のところも多

い。以下、天然氷作りの場所・営業者・営業年代・氷池の数などについて、確認できたことを報告しておきたい。

なお、典拠として示した「県行政文書」は埼玉県立文書館所蔵資料、「菊池建太著」は『天然氷の歴史と今—究極のエコロジー産業をおって—』（2006年）を表し、掲載した地図は国土地理院のweb地図を利用したことをお断りしておく。



図 1

No.	場 所	河川名等	No.	場 所	河川名等
①	寄居町折原字岩井堂・木ノ下・淵ノ上	荒川	⑨	東松山市小松原町	台地下の湧水
②	寄居町鉢形字城	荒川	⑩	飯能市大河原	入間川
③	寄居町鉢形字甘粕・関山	荒川	⑪	飯能市唐竹	山麓の湧水
④	寄居町小園字大上	荒川	⑫	川越市南田島	自噴水
⑤	小川町腰越字赤木	栗山川	⑬	川越市小中居	自噴水
⑥	小川町青山	円光寺の池	⑭	伊奈町小針新宿	台地下の湧水
⑦	小川町小川字川向	寺沼	⑮	伊奈町小針内宿	台地下の湧水
⑧	ときがわ町日影字谷	大谷川	⑯	さいたま市岩槻区本丸一丁目	台地下の湧水
	ときがわ町玉川字原	台地下の湧水			

①寄居町折原字岩井道・字木ノ下・字渚ノ上 荒川

- ・営業者：今村藤兵衛、町村光五郎、向井廣吉
- ・営業年代：明治時代～終期不詳
- ・氷池数：不詳
- ・典拠：県行政文書、黒瀬寿雄氏談

明治32年（1899）の県行政文書によれば、旧折原村の岩井道地先で今村藤兵衛と町村光五郎、木ノ下地先で町村光五郎、渚ノ上地先で向井廣吉が、それぞれ荒川の河原に製氷場を設けることの申請を図面を添えて行っている。簡単な図面のため、詳しい場所は確認できなかった。

昭和16年生まれの話者（黒瀬氏）によれば、岩井道は折原の中では最も寒いところという。滝沢という名の小支流が荒川右岸に流れ込んでいるあたりに氷池があったらしいが、現在は玉淀湖の湖底になってしまっている。採れた氷は、そばの岩壁の洞窟に保存していた。

木ノ下は岩井道よりも下流。幅7m、長さ30mほどの「お玉っ渚」と呼ぶ水たまりがあり、そこが氷池だったかもしれない。子供のころはそこでスケートをして遊んだという。渚ノ上は八高線鉄橋の少し上流。ただいずれも話者が子供のころ、明治25年生まれの祖母から聞いた記憶のため詳細は不明。



②寄居町鉢形字城 荒川

- ・営業者：藤田善作（寄居町藤田）
- ・営業年代：明治時代～終期不詳
- ・氷池数：2面
- ・典拠：県行政文書

明治37年（1904）の県行政文書に掲載されている。字城は鉢形城跡から正喜橋にかけての地名、藤田善作は荒川対岸（左岸）にある

宗像神社の官司である。添付図面によれば、氷池の場所は現在の正喜橋直下の荒川右岸で、饅頭岩（現在も流れの中にある）を基準に位置を示している。申請書は氷池の構造図面をつけて、下記のように詳細に記している。

出願ノ位置ハ毎年天然ノ寄洲ヲ生シ、其凹ミニ荒川ノ流水流入停滯セルガ故ニ、其塵並ニ泥土ヲ浚渫シテ清潔ニナシ、天然ノ形状ヲ損ハセス、南方ハ岩石ナルを以テ其底トシ、西ハ浅瀬若クハ石河原、東北ノ二方ハ石河原ナルヲ以テ各砂礫ノ口込ヲ防ク為メ厚板ヲ構ヒ、採取ニ便ナル為ニ足場木ヲ掛テ凍氷ヲ切採ルモノトス、水道入口ハ木製ノ水門ヲ仮設スルカ、或ハ砂礫ヲ積ミテ砂濾ニスル事アリ、然レハ天然ノ寄洲ニ幾分ノ人工ヲ加テ清潔ニスルニ過キス、故ニ多クハ自然ニ河原ヲ潜リテ本流ヨリ流入



写真1. 中央の饅頭岩の奥が氷池の場所だった

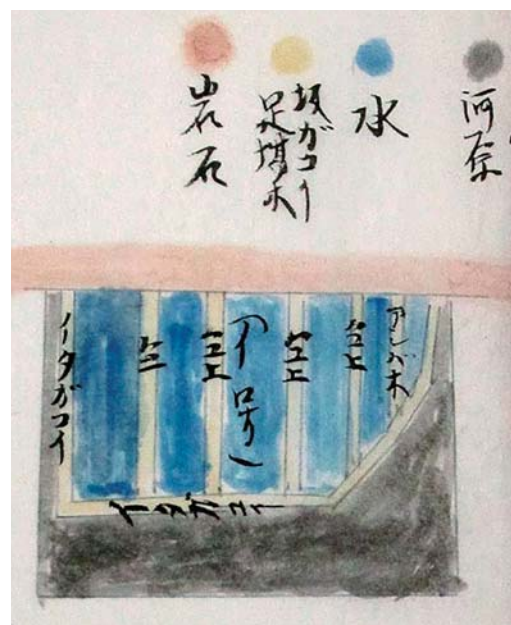


写真2. 申請書の添付図面。三方を板で囲み、上に足場木を渡してある

スルモノニ有之候、而シテ毎年十二月ニ設置シ翌年三月末日迄ニ取払モノニ御座候
氷池の南側は鉢形城跡の断崖が続いているので、終日日陰になる場所である。厚板で周囲を囲い、内側には平行に何本も足場木を設置して、その上によって氷を切っていた。また、氷池の設置期間は12月から3月末日までとし、期間が過ぎたら取り払うとある。

③寄居町鉢形字甘粕・字関山 荒川

- ・営業者名：斎藤秀次郎
- ・営業年代：明治時代～終期不詳
- ・氷池数：2面
- ・典拠：県行政文書

明治31年（1898）の県行政文書に掲載されている。甘粕・関山は正喜橋の下流右岸の地名。斎藤秀次郎が申請し、「製氷場設置ノ為メ」として氷池の面積と公有河原地1年間の使用料を明記しているが、詳細な場所は確認できなかった。



④寄居町小園字大上 荒川

- ・営業者名：上田久治良
- ・営業年代：明治時代～終期不詳
- ・氷池数：1面
- ・典拠：県行政文書

③と同じく明治31年（1898）の県行政文書に掲載されている。大上は玉淀大橋の下流右岸の地名で、当館（県立川の博物館）が立地している場所も含まれている。小園の上田久治良が申請し、氷池の面積と1年間の使用料を明記しているが、詳細な場所は確認できなかった。

⑤小川町腰越字赤木 栗山川

- ・営業者名：鯨井国平・鯨井宗太郎・内田彦

三（共同経営）

- ・営業年代：明治から昭和10年頃まで
- ・氷池数：3面
- ・典拠：内田康男著『ふるさと腰上—その歴史と伝説—』、鯨井均氏談

栗山川右岸の山裾で製氷していた。もともと水田だったが、日陰で収穫も少ないので氷池にしたという。地元では氷場（こおりば）と呼んでいた。昭和初期の最盛期には、赤木の鯨井国平、鯨井宗太郎、栗山の内田彦三の3者が共同で「西武凍氷」という会社を組織して製氷し、「赤木氷」の名で小川町内の需要の大部分を賄っていた。

秋に氷場の補修をしておき、栗山川の水を引き入れて凍らせた。切り出しは赤木集落の人たちが総出で行い、作業は真冬でも汗を流すほどだったという。氷倉は当初は町場に近いところにあったが、大正の末頃壊れたため、新しい氷倉は氷場の脇に建てた。広さは2間×3軒で、氷を積むために1丈3尺（約4m）の高さがあった。この中に箆を敷き、壁と氷の間におが屑を詰めて保存していた。

氷池はその後、昭和31年からニジマスの養魚場として使用されたが、5、6年で廃業した。今でもコンクリートの一部がわずかに残っているが、氷池の面影はない。



⑥小川町青山 円光寺の池（湧水）

- ・営業者名：川野幸太郎
- ・営業年代：大正時代か
- ・氷池数：不詳
- ・典拠：内田康男著『ふるさと腰上—その歴史と伝説—』、菊池建太著

営業者の川野幸太郎（小川町小川）の本業は八百屋で、現在全国展開しているスーパーマーケット「ヤオコー」の前身である。

大峰山の北麓にある円光寺の境内に湧水をためた池があり、そこで製氷していた。切り出した氷は、同町大塚の稲荷町にある氷倉に運んで保存した。

現在円光寺の境内は、湧水が出ていた斜面に墓地が拡張されて当時の面影はなく、氷倉も昭和初年にはすでに使用されなくなって、戦後壊したと伝えている。



⑦小川町小川字川向 寺沼

- ・営業者名：吉田金三郎
- ・営業年代：明治30年代
- ・氷池数：1面
- ・典拠：内田康男氏より

吉田家では本業の牛乳店を営むかわら、西光寺わきの寺沼（通称）で製氷していた。人を雇って切り出し、近くにあった氷倉に保存していた。氷倉は地元産の下里石（緑泥片岩）などを積んで壁とし、上部は木材を載せた上に土をかぶせてあった。床を少し掘り下げ、おが屑や籾殻を入れて氷を保存した。夏になると小川の町場の店に販売し、小川の市（六斎市）では、これを1杯1円の氷水として売ったという。

寺沼は今も山裾に残り、そばの斜面はカタクリの群生地として知られている。



⑧-1 ときがわ町日影字谷 大谷川

⑧-2 ときがわ町玉川字原 台地下の湧水

- ・営業者名：関口登吉
- ・営業年代：⑧-1は不詳、⑧-2は昭和6年頃まで
- ・氷池数：⑧-1は2面、⑧-2は1面
- ・典拠：菊池建太著、関口定男・根岸稔各氏談

関口家は旧玉川村の中心部（現ときがわ町玉川）にあり、当時は製材業を営んでいた。製材で出るおが屑を活用するため製氷を始めたと伝えている。自宅の敷地内に氷倉があり、近隣の家々では熱冷ましなどに氷の需要があった。

氷池は自宅から3km以上離れた日影地区の谷あいにあった。谷（やつ）川に流れ込む大谷（おおやつ）川の水を利用した。東光寺裏手の斜面に2段の氷池を作り、製氷していた。周囲をコンクリートで固めた氷池は、今も形良く残っている。

氷倉は自宅にあったが、氷池まで遠かったので、のちに関口家では原地区に場所替えし、台地下の湧水を利用して製氷するようになった。ここは都幾川と台地との間に水田が広がり（現在は畑か荒地になっている）、台



写真3. 斜面に作った氷池が今も残っている

地下には湧水を集めたため池があった。氷池はため池の脇にコンクリートで造られ、そばに氷倉もあった。今ではため池も氷池も埋まってしまっている。

なお、昭和5年の「埼玉製氷同業組合員名簿」には「玉川村 関口登吉」の名前があり、これは関口家の2代前の当主に当たる。

⑨東松山市小松原町 台地下の湧水

- ・ 営業者名：高埜浜吉・次郎
- ・ 営業年代：昭和20年頃まで
- ・ 氷池数：1面
- ・ 典拠：菊池建太著、高埜彰二氏談

高埜家では、3代前の浜吉とその子次郎のときに製氷をしていた。屋号は干(かどじゅう)といい、本町二丁目で八百屋を営みながらの氷作りであった。

市野川右岸の台地下からの湧水を利用して氷池を作り、周囲には水田が広がっていた。現在台地上は住宅地となり、台地下は西友東松山店の駐車場になっているが、台地斜面には自然が残り、湧水を集めた池には「ほたるの里」の看板が立っている。

氷の切り出しは、近所の人たちを頼んで行った。使用した氷鋸や氷鉋などの道具は、現在菊池建太氏（東松山市）の所蔵となっている。氷倉は台地上にあって、おが屑を用い



写真4. 高埜家で使った道具類（菊池建太氏所蔵）

て保存していた。

氷は市内の製氷会社に納め、そこでは蚕卵の孵化時期の調整に使っていた。家族が発熱したからと氷を買いに来る人も多く、氷枕に入れて使っていた。夏にはかき氷を買い求める人も多かったようで、同家には今でもかき氷用のガラス器がたくさん残っている。

⑩飯能市大河原 入間川

- ・ 営業者名：工藤製氷所（工藤繁蔵）
- ・ 営業年代：不詳
- ・ 氷池数：1面
- ・ 典拠：飯能市立博物館調査データ

昭和5年の「埼玉製氷同業組合員名簿」に「飯能町元飯能 工藤繁蔵」と載っている。

この製氷場を撮影した写真が飯能市立博物館に所蔵されている。明治末から大正初期にかけて撮影されたもののようで、場所は水辺の行楽地として知られている飯能河原のやや上流で、入間川の右岸寄りに木組みの氷池が見える。氷池の南側（右岸側）の斜面には杉らしき針葉樹の林があって、日陰を作り出している。氷池のすぐ上流（写真右手）に見える木造の橋は旧岩根橋である。

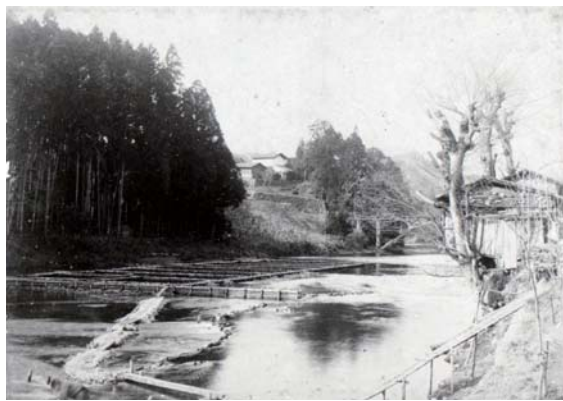


写真5. 日陰に木組みの氷池がある。手前に見える通路で行き来していたらしい

営業者は地元で「工藤氷屋」として知られ、飯能河原を見下ろす左岸側に自宅があった。ただ早い時期に廃業したようで、当時の製氷についての情報を得ることはできなかった。

なお、製氷池のあたりは、戦後から昭和40年代半ばくらいまでスケート場になり、水をためる堰を築いてボート場として利用された時期もあった。

⑪飯能市唐竹 山中の湧水

- ・営業者名：宮寺三平
- ・営業年代：不詳
- ・氷池数：2面
- ・典拠：宮寺義宏・大野忠司・本橋幸子各氏談

宮寺家（宮寺材木店）は、かつて鍛冶屋だったが、現当主の2代前の宮寺三平のときに材木店を始め、製氷も同氏が行っていた。大仁田山（標高505m）の北東の谷あいには湧く水を利用し、2か所に氷池を作って製氷していた。1か所はヨマギ川（ヨマギ入）という小沢の右岸、もう1か所は入間川（俗称は名栗川）右岸にある白髭神社の北側の日陰で、現在は「唐竹こども広場」になっている。水源の水は、のちに対岸の中屋敷地区の簡易水道にも使われていた。

氷の切り出しには刃幅の広い鋸を使った



写真6. 片手用の氷鋸（宮寺義宏氏所蔵、写真提供：飯能市立博物館）

が、すでに失われており、保存した氷を販売するときに使用したと思われる片手用の氷鋸が残っていた。

氷はおが屑を利用した氷倉に保存し（場所は不詳）、飯能の町の氷屋（⑩の工藤氷屋か？）に荷車で出荷していたという。

昭和5年の「埼玉製氷同業組合員名簿」に宮寺三平の名前が掲載されている。ところが昭和7年生まれの子にはコンクリート製の氷池は記憶があるものの、製氷作業の記憶がないとのことなので、昭和10年代には廃業してしまったものと思われる。

⑫川越市南田島 自噴水

- ・営業者名：森田家（森田銀次郎・嘉吉）
- ・営業年代：昭和16年まで
- ・氷池数：不詳
- ・典拠：森田康雄・島村勇各氏談

明治32年の「入間製氷組規約」に森田銀次郎、昭和5年の「埼玉製氷同業組合員名簿」に森田嘉吉の名前がある。銀次郎は現当主より4代前、嘉吉は3代前の当主である。創業は不明だが、その後も2代前の次郎吉、先代の嘉吉に至るまで農業の合間に続けられ、昭和16年に嘉吉が出征したことで廃業した。

場所は川越市東部の水田地帯で、人家が点在していた。森田家では、宅地内に湧き出る自噴水（イド）を利用し、うっそうと茂る屋敷林の北側の水田の一部を借りてレンガ積み氷池を作った。同家所蔵の資料では、ここ以外にも2か所で製氷していたことが記録されている。

切り出した氷は、自宅にあった氷倉（土蔵）に、おが屑を詰めて保存した。夜中でも熱冷ましに氷を買い求めに来る人がいたし、病院での需要もあった。商店や個人の家に氷





写真7. 小型の氷鉗（森田康雄氏所蔵）



写真8. 大正14年の氷検査済証（森田康雄氏所蔵）

同家には大正12年、大正14年、昭和3年の製氷認可書・検査済証、「埼玉製氷同業組合員」の看板、氷鉗などが保存されている。これらの資料によれば、1シーズンの生産予定が3500貫（約13トン）から4000貫（約15トン）という膨大な量が示されている。

⑬川越市小中居 自噴水

- ・営業者名：小池家
- ・営業年代：不詳
- ・氷池数：不詳
- ・典拠：小池豊治・加藤優男各氏談

明治32年の「入間製氷組合同規約」に小池宗吉と小池忠次郎の名前が載っているが、昭和5年の「埼玉製氷同業組合員名簿」には名前が見られないので、早くに廃業してしまったのかもしれない。小中居も⑫の南田島と同じく、川越市東部の水田地帯である。かつて「氷屋」と呼ばれた小池家で製氷を行い、氷

池の場所まで確認できたが、転居してしまったため、宗吉・忠次郎との関係など詳細は不明のままである。

⑭伊奈町小針新宿 台地下の湧水

- ・営業者名：齋藤家
- ・営業年代：明治21年～昭和初期か
- ・氷池数：1面
- ・典拠：齋藤（英）家文書、齋藤和郎氏談

齋藤家では、現当主から4代前の齋藤英吉（天保13～明治33）—中一郎—英男（明治22～昭和11）の3代にわたって製氷を行っていた。同家には明治21年に英吉が氷池設置について地主と交わした契約文書が残っているので、この年から始めたものと思われる。ちなみに英吉は旧小針村の助役を務めた家柄で、同家母屋は江戸時代の農家建築として国の登録有形文化財に指定されている。

氷池があったのは、自宅から600mほど離れた場所で、現在「カオルキッズランド伊奈園」という保育園になっている。埼玉新都市交通伊奈線（ニューシャトル）内宿駅から200mほどで、周辺は宅地開発が進んでいる。保育園の南側に台地が広がり、台地上には樹林が残されているが、台地下に広がっていた水田は宅地化されている。この樹林をかつては氷場山（こおりばやま）と呼び、そこからの湧水を日陰に作った氷池で凍らせていた。

また前記の契約文書には、小針新宿の大塚紋蔵（⑮の家）が所有する「倉田村横山下」の水田を借りて氷池を作りたいとある。この場所がどこか不明だが、桶川市倉田と伊奈町西小針との間に水田があったので、このあたりの日陰を利用したのかもしれない。

なお、県立文書館に寄託されている齋藤（英）家文書には、次のような製氷関係資料



があり、当時の状況を知ることができるが、詳細は省略する。

- ・氷製造ニ付約定（明治21年）
- ・氷売出帳（明治22年）
- ・製氷組合理約（明治32年）
- ・鋸屑引取覚帳（明治44年）
- ・氷販売先覚（明治時代）
- ・氷ほかの注文書（大正10年）

⑮伊奈町小針新宿 台地下の湧水

- ・営業者名：大塚紋蔵
- ・営業年代：明治～大正時代
- ・氷池数：不詳
- ・典拠：大塚徳明氏談

現当主より3代前の大塚紋蔵（嘉永5～大正14）のときに製氷していた。次の忠一郎にまで引き継がれたか否かは明らかでない。母屋が火災に遭っているため、関連資料が残っていない。母屋に隣り合っていた氷倉があったとのことだが、これも類焼してしまったようで、壁に使われた大谷石だけが残っている。

氷池のあった場所は、伊奈町羽貫にある西蔵院境内の北側に広がる低湿地だった。湧水を利用したもので、ここを氷場（こおりば）と呼んでいた。現在この一帯は伊奈町町政施行記念公園になっており、今でも豊富な湧水が池を作っている。

⑯さいたま市岩槻区本丸一丁目 台地下の湧水

- ・営業者名：福田家
- ・営業年代：明治中期～昭和20年代初期
- ・氷池数：1面
- ・典拠：福田洋子・大島英夫各氏談

製氷は2代前の九右衛門（昭和7年没）が始め、その後、九右衛門—廣吉—貞三郎と3代にわたって昭和20年代の初めごろまで続いていたという。「奥州屋氷室」という店名で、明治32年の組合員名簿には九右衛門、昭和5年の名簿には廣吉の名前が載っている。また大正元年の岩槻町職業調には「製氷1戸、六千貫」とある（大正4年発行『岩槻誌』）。

天然氷の製氷をやめてからは、越谷市にある越ヶ谷製氷冷蔵株式会社から機械氷を仕入れ、平成10年代まで牛乳とともに販売していた。



写真9. 台地下の日陰に氷池があった

自宅は台地の北のはずれにあり、その北には俗に「底なし沼」と呼ばれた大同沼と水田（深田）が広がっていた。現在は宅地化が進んで当時の面影は残っていない。氷池は台地下からの湧水を利用して作り、氷池の南側と西側には樹林があつて日陰をつくっていた。

氷の切り出しには刃幅の広い鋸を使い、近所の人に手伝ってもらって作業をした。氷倉では靱殻を詰めて氷を保存していたという。水田地帯のため、おが屑ではなく靱殻を使っていたようである。

謝 辞

本報告にあたり、下記の方々に多大なご協力をいただきました。ここに厚く感謝申し上げます。

埼玉県立文書館、飯能市立博物館、東光寺、上田功午郎、内田康男、大塚徳明、大島英夫、大野忠司、加藤優男、川邊次雄、菊池建太、鯨井均、黒瀬寿雄、小池豊治、齋藤和郎、島村勇、関口定男、高埜彰二、根岸稔、福田洋子、藤田尚己、宮寺義宏、本橋幸子、森田康雄（敬称略）